

発表の概要

1. 「異」から考える異文化コミュニケーションとは
 - 1) 知覚対象としての「異」とは？ (山本, 2022)
 - 2) 「異」は2018年大会「非対称性のもたらす異文化的状況」の発展形
 - 3) 「非対称性のもたらす異文化的状況」の背後にある理論的枠組み
 - a. 異文化間協働の活性化の概念モデル (山本, 2011)
 - b. コンテキスト・シフティング (Ishiguro, 2015; 石黒, 2016; 2022)
2. 知覚構成主義とは
知覚構成主義 (Bennett, 2022)
3. カテゴリーの意識的な活用とは
観測カテゴリー (Bennett, 2017; 2020; 2022)
新しいことというよりは、ナラティブ、語り方を変えている。

山本志都・石黒武人・
Milton Bennett・岡部大祐

2022年11月下旬発売
三修社

1. 「異」から考える異文化コミュニケーションとは

1) 知覚対象としての「異」とは？ (山本, 2022) まえがきより

いつもと同じ、あるいは誰もが同じであることを想定した関係性がバランスを保てなくなると、一様さが破られて多様になり、非対称な「異」でつながる関係性が現れます。

同じ集団や組織に所属している場合でも、関わり方や役割が異なりうるということのほか、そのときどきの話題や目的などによって立ち位置が変わることがあります。たとえば、新入りと先輩、推進派と反対派、インテア派とアウトア派、夜型と朝型、何かの経験者と未経験者などです。立場がどう分かれるかはさまざまですが、これらはそのときどきの背景情報、すなわちコンテキストに応じて顕在化した非対称性による「異」でつながる関係性を表しています。私たちは、同じである中にも、裏にさまざまな「異」を介してつながる関係性を生まているということなのです。

山本志都・石黒武人・
Milton Bennett・岡部大祐

2022年11月下旬発売
三修社

1. 「異」から考える異文化コミュニケーションとは

1) 知覚対象としての「異」とは？ (山本, 2022) まえがきより 続き

本書では、はじめに「異」はどのような形であらわれるのか、それは何を基準としたとき生まれるギャップやズレなのかを、より細やかに繊細に知覚する力をトレーニングします。

観点や着眼点であるところの「目のつけどころ」を変えるたび「異」は姿を変えるということがわかると、見る者の目が「異」をつくっていることも実感されるようになります。情報を処理する上での知覚構成の単純さあるいは複雑さの程度によって、私たちがイメージ化できる人間関係や社会の姿が変わるのです。現実世界に投影される絵は、対立の構図にも、豊かに創造性あふれるものにも変わります。

「異」 第1章より

- 何を現実味のある現実と感じ、そこで何が適用すると想定しているのかが、互いの間でズレたりギャップができてきたりすることを「異」としてとらえる。
- 「異」はコンテキスト上で自他に分かれた境界上のズレやギャップとして知覚されるものであり、立ち位置の違いが作り出すズレやギャップと言えはわかりやすいかもしれない。話題が変わること、状況が変わること、関連性が高くなるコンテキストも変化する。それにもない人びとの関わり方が変わり、異なる立場が生じると、間にズレやギャップができる。
- どんなに仲のよい相手でも、同じ立場で話がスムーズにできるときばかりではない。立場が分かれば話が通じにくくなり、理解してもらおうための説明が余分に必要になる。私たちの間には「そこは同じだね」と「そこは違うね」がたくさんある。特定のコンテキストに関わっている間だけ関連性が高くなる現象を、境界設定の条件としたとき、そこに生じる非対称な立場性は、互いの間にズレやギャップとしての「異」を生み出している。

コンテキストで有意義になる境界形成

「異」 第1章より 続き

- まとめて、関連性の高いコンテキストが何であるかをききかけとして、異なる立場に分かれたときに、ギャップやズレなどとして知覚される差異を、コンテキスト上にあられる知覚対象としての「異」として扱う。「知覚対象として」だけ加えたのは、そのような「異」とは、ある瞬間、ある切り口で見たときに顕在化して見える存在であり、常駐する存在ではないことを強調するためだ。日本人と外国人も、学生と社会人も、理系と文系も、猫派と犬派も、朝型と夜型も、その区別がコンテキスト上で意味をもつときだけ有効になる分け方だ。時にその差異を知覚する対象をあらゆるカテゴリー自体を「異」として知覚することもある。そして分けるだけでなく、境界を引き直してつながれるようにすることを考えよう。

図と地の分化により知覚する対象、脱物象化構成主義、カテゴリー化への意識づけ

2) 「異」は、2018年多文化関係学会 第18回年次大会での報告における「非対称性をもたらす異文化的状況」の発展形

「異文化感受性を再考する：認知的複雑性と非対称性をもたらす異文化的状況に注目して」

文化の定義は集団レベルであり、異文化も集団的に理解されている。しかしこのことが知見の応用範囲を狭めているとも言える。仮に、**コンテキスト上に「非対称性」のあらわれたとき**を、「異文化的状況」の発生としてとらえると、DMISは現代の社会的なニーズにもっと対応できるのではないかと。

家庭や職場、学校では、様々なコンテキスト上で多様な非対称性が現れ、共生のために何ができるかが課題となっている。たとえば、LGBT、認知症、発達障害、子育てカッパ/シングルピアレント、医療的ケア児、外国につながるを持つ子どもたち等は、あるコンテキストに直面したとき厚みが増える可能性を持った、一つの立場である。

多文化関係学会年次大会抄録集より 山本 (2018)

3) 「非対称性をもたらす異文化的状況」の背後にある理論的枠組み



a. 異文化間協働の活性化の概念モデル

(山本, 2011)

- ① 異文化性のあらわれ (西阪, 1997)
- ② 特定タスクの生態環境と異文化間マイクロ文化 (Fontaine, 1996, 2006)

b. コンテキスト・シフティング

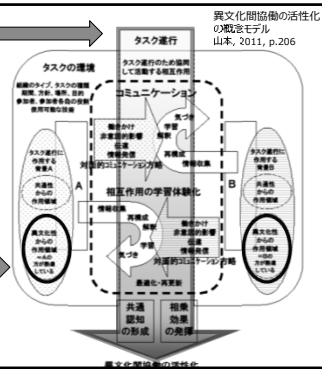
(Ishiguro, 2015; 石黒, 2016; 2022)

相互作用は、ある特定の
コンテキスト上に
展開される

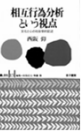
タスク遂行の過程に現れる非対称性をリソースにして、相互作用を学習体験化することで、共通認知を形成し、相乗効果を発揮して、異文化間協働を活性化するというモデル

異文化性の作用する領域
非対称性
どちらの方が熟達・熟知

最適化・再更新により双方の間で醸成したコンテキストが出現する。相互構成・相互適応
第三文化、異文化間マイクロ文化、会話の共通基盤



異文化性のあらわれ 西阪 仰 (1997)



- * エスノメソドロジーの観点から、**コミュニケーションの参与者間の文化差が当事者間の相互行為の中で志向され、意味(レリヴァント)になることを異文化性のあらわれと呼ぶ。**
- * 異文化性は相互行為の具体的な展開の中で、その展開を通して達成される。「日本人」と「外国人」のようなカテゴリー対が会話の中で相互行為的に達成されるとき、異文化性は立ち現れているという見方をする。
- * 実践的な目的のためにカテゴリーに結びついた活動をしていて達成されることとあれば、当人たちの意思や思いと無関係に達成されることもある。

相互作用上で境界形成したカテゴリーとその非対称性に関わる

特定タスクの生態環境と異文化間マイクロ文化 (Fontaine, 1996, 2006)

* ミクロ文化とは「ある特定のタスク(特定の性質のタスクということではなく、タスクの個別の発生)に従事する際に重要となる側面に関連する一種の共有された認知」であり、主としてタスクへの参加者間のみ共有される文化である。制度化されたり、形式化されたり、記録されたりすることはほとんどない。

* 実際に課題に取り組む際の1つ1つのタスクの生態環境は「タスクの目的、実施する人にとっての目的の重要性、タスクが行われる物理的環境、参加者数、類似したタスクでの過去の経験、参加者間の現在の関係性、互いのつきあひへの将来的な見通し、動機、スキル、性格その他」によって特徴づけられるという。これらをフォンテインは「**特定タスクの生態環境**(ecologies of specific tasks)」と呼んでいる。

* 参加者に多様性のある異文化状況でのタスク遂行では、**生態環境に合わせ調整された方略が最適方略として選択されることが絶えず繰り返されている**。このような特定の方略の適性は参加者によって共有されるようになり、やがて「**第3文化**(third culture)」と一般的に呼ばれるような文化として形成されていく。**第3文化は「われわれのやり方」や「彼らのやり方」を超え生態環境により適していると思える相手のやり方を折衷する。**

相互作用を通じてコンテキストに最適化した適応を均衡化させる

コン
テク
スト
←

まとめと

- 異文化コミュニケーションは、文化の概念を介在させる代わりに、**状況の中で相互行為的に達成される非対称性(異文化性)**によって、説明することができる。
- **非対称性は、特定のコンテキスト(特定タスクの生態環境)に参加した相互作用上において、ギャップがズレが生じた際の境界形成とカテゴリー化によって達成される。**

コンテキスト・シフティング

石黒武人 (2016) 現象の多面的理解を支援する「コンテキスト間の移動」に関する一試論—グローバル市民の醸成に向けて— 順天堂グローバル教養論集1, 32-43.

多くの人が特定の限られた「コンテキスト (物理的環境、社会・文化的な規範、規範、当事者間の共有知識や対人関係など)」(p.33) を自動的に前景化させることによって、現象を単純化、矮小化して解釈している問題を指摘。

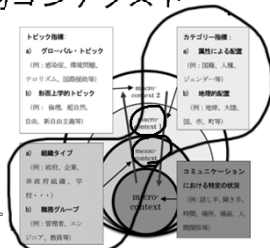
「その実践者が、自己、他者、自他の関係性を含む眼前に立ち現れる現象を単純化し否定的に捉えている状態から抜け出し、新しい視点や理解を得るために、**複数の異なる認知的枠組み (具体的にはコンテキスト) へ移動すること**」(pp.36-37)

ミクロ、メゾ、マクロ 3つのレベルの潜在的コンテキスト

ミクロはコミュニケーションにおける個別的な状況
メゾは組織タイプや職務グループにおけるコンテキスト
マクロには、**属性や地理的配置などのカテゴリーに加え、人びとによって用いられる「概念 (共有知識)」がコンテキストとして含まれる点が特徴的**であり、グローバルトピック (感染症、環境問題、テロリズム、国際援助等) と形而上学的トピック (倫理、超自然、自由、新自由主義等) が示されている。

石黒のCSの概念が異文化間能力として有益な点は、無意識で自動的に選択したコンテキストから離れることによって、様々なコンテキストを前景化させ、そこから見える景色や、感じ取られるリアリティを変えられるところにある。

山本志都 (2019). 関係構築を可能にする多様なコンテキストの創出—コンテキスト・シフティング・エクササイズの実践— 異文化コミュニケーション 22, 115-131.



石黒, 2016, p.38

コンテキスト・シフティングと DMISのCognitive frame-shifting

Ishiguro, T. (2015). Intercultural context-shifting: A praxis toward a multiple understanding of interpersonal relationships for constructive intercultural communication 明海大学大学院応用言語研究 17(1/2) 119-131.

コンテキスト・シフティングの一側面は、**Bennett (1986)による異文化感受性発達モデル (DMIS: Developmental Model of Intercultural Sensitivity)の「適応」の段階における認知的フレーム・シフティングと共感 (エンパシー)に関連づけられて説明されている。**

We do not need to have the same meaning as others, but isomorphic meanings similar to those of others, so that the interactants can have common ground on which to build relationships.

他者と同じ意味ではなく、他者のそれに近い同型の意味を持つことで、相互作用者が関係を構築するための共通基盤を持つことができる。

まとめると

- 異文化コミュニケーションは、文化の概念を介在させる代わりに、**状況の中で相互行為的に達成される非対称性 (異文化性)**によって、説明することができる。
- **非対称性は、特定のコンテキスト (特定タスクの生環境) に参加した相互作用上において、ギャップがズレが生じた際の境界形成とカテゴリー化によって達成される。**
- コンテキストには、**集団や社会的カテゴリーのくくりには抛らないトピックや概念、および個人間の関係が含まれる。**
- 従来の異文化コミュニケーションの扱う基本単位は、相互作用に先行して存在することを仮定した社会的カテゴリーや集団の文化であったが、さまざまな**コンテキストに立ち上がる非対称性が「異」として知覚されることにもなう調整**を扱えば、応用範囲が広がる。

2 知覚構成主義とは



これから紹介するBennett (2022)の序章は、山本の書いた章を英訳した原稿と本全体の目次をBennettが読み、他の著者も交えての議論を踏まえた上で書かれている。

Bennettは、山本のアプローチが知覚構成主義であることを序章で定義づけた。

それ以前にBennettによりこの概念が明示されたり定義づけられたりしたことはないが、Bennettには知覚についての著書が多くある。

例えば Bennett, M. J. (2020). Perceptual Representation: An Ethic Observational Category for Guiding Intercultural Communication Adaptation. In D. Landis & D. P. S. Bhawuk (Eds.), The Cambridge handbook of intercultural training (4th ed., pp. 617-639). Cambridge University Press.


知覚構成主義
perceptual
constructivism

山本 (2022) における 構成主義への知覚からのアプローチ

1. 図地分化、あるいは全体の中に境界線を引き、囲い込む (カテゴリー化) ことで、**可視化して、知覚対象にして見ている。**
2. 知覚を通して構成する世界を、**現実味のある現実として生きている。**
3. 知覚体験は感覚器官がとらえた刺激を中枢神経 (脳と脊髄) に伝える働き、一言でいうと**脳の情報処理**によってもたらされている。**情報処理はコミュニケーションへの参加を通じて状況学習的に獲得された文化的なもの**であると同時に、**個人の神経発達多様性**にも影響されるものである。
4. **自分にはない感覚や知覚でも**、他者に見えて、聞こえて、感じられていることを**肯定**することから始める。**その世界をリアルなものとしたときの反応や行動があることを知る。** (注: 他者の意見や価値観を肯定するのではない)
5. 考え方を変えるより、**注意の向け方を変える**ことで見える絵、耳に入る言葉、イメージとして想像できることを変える。それは次に起こることを予測する**シミュレーションを変え、予告の自己成就として作用する。**

2 知覚構成主義とは

Bennett (2022) 序章より



(ニュートン主義、相対主義を経て) 現在の私たちは、**量子的パラダイム**の知へと転換しようとしている。量子力学というのは物理学の用語だが、その考えかたが社会科学の分野にも取り入れられるようになった。その考えかたを**構成主義 (constructivism)** という。構成主義は、**物事は確かにコンテクストの中に存在するが、そのコンテクストは私たちがつくり出しているという視点を持つことによって、相対主義をリフレームしている。**

構成主義は幅広い学問分野でさまざまに適用されている。本書における構成主義を定義するならば、それは**知覚構成主義 (perceptual constructivism)** であることができる。知覚する対象が何であれ、その対象は**私たち自身によって知覚されている**。何が言いたいのかというと、**見ているもの、聞いているもの**というのは、私たちの知覚の「外側に」存在するのではないことに注意を向けてほしい。

Bennettの感覚と知覚についての考え方

forming-feeling model

Bennett & Castiglioni (2004) p. 255に基づき解釈/説明すると

得ている感覚 (feeling) を認知的な構成要素や特定の行動・特定の感情といった形に形成すること (forming) がコミュニケーションであるとする。その場合の知覚とは、さまざまに特定の形をとりながら構成されている現実の全体性から得ることのできる感覚 (feeling) として定義される。すなわち、formingとfeelingは円環的な関係にあり、**環境から感覚や感情 (feeling) として何かを直感的につかみとっているときには境界形成および図地分化した区切りが全体性に生じており、それがformingである**ということが出来る。formingは言語や概念などカテゴリー化を介して行われていると考えられるため、そのように形のないところに形を与えるformingがコミュニケーションであると考えられている。そうやって**数々のformingを通じて構成されている現実の全体性を、感覚を通じて感じ取るfeelingこそが知覚である**と考えられている。

ゆえに、何かの気配を察知して、**そちらへ注意が向き、感じ取った瞬間には形ができ、その形で情報を整理して組み立てながら現実を構成している**。その全体性を感じて、**またそこに意味を与える**。その円環的な営みの中で「異」や異文化の経験を説明するのが異文化感受性であるということもできる。



Bennett (1977) による
ミネソタ大学博士論文からのアイデア

Bennettの感覚と知覚についての考え方

forming-feeling model

forming-feeling modelに基づく、私たちは何かの気配を察知して、**そちらへ注意が向き、感じ取った瞬間には形ができ、その形で情報を整理して組み立てながら現実を構成している**。その全体性を感じて、**またそこに意味を与える**。その円環的な営みの中で「異」や異文化の経験を説明するのが異文化感受性であるということもできる。DMISの「統合」とは、**境界形成に意識的になる構成主義**。

「意識とは“感覚に形を与えること”である」とするBennett (1977) の主張に実証的根拠を与えるものとしては、神経科学者のDamasio (1999) が引用されている (Bennett & Castiglioni, 2004の中で)。

意識は、われわれが見たり、聞いたり、触ったりするとき、**事象の感情として**はじまる。もう少し厳密に言えば、それは、われわれの有機体の内部における視覚的、聴覚的、触覚的、内臓的など、あらゆる種類のイメージの形成に伴う感情である。

そして連綿と文脈に置かれると、その感情は、それらのイメージにわれわれのものというレッテルを貼り、それによりわれわれは、まさにその言葉とおおむね、われわれは見る、聞く、触るなどと言う。中核意識を生み出すようにしている有機体は、それらに聞いたり触ったりイメージをそのつど形成するようにならなければならない。それらに聞いたり触ったりすることを認識するようにはならない。…意識は、そのもつとも構まなければしまりから認識であり、認識は意識である。

アントニオ・ダマシオ『意識と自己』p. 41

Bennett (2022) 序章より 続き1

私たちは自分の知覚がどのように現実を構成するかについての責任を負わなければならない。私たちは**知覚することを通して対象を創造している**。国境を例に挙げよう。国境という名の政治的境界線は、一度つくられると地図上に存在して、私たちの外側に物理的に存在し続けるモノのように思える。移住したくとも、国境が障壁となるということもあるだろう。とはいえ、**モノは依然として創作物なのであり、つくったものはつくり変えることができる**。すべての構成主義を特徴づけ、私たちの生きる現実に対する責任の根拠にあるのは、この**変更可能性**である。

つまり、**環境から境界形成して図地分化したときの知覚対象を創造している**のであり、「異」も境界形成して図として知覚対象になった**一次的な囲い込みの存在**。だがカテゴリーには、つくったことを忘れて実体化させ、自然物であるかのように扱う「**物象化**」(Berger & Luckmann, 1966) が起こりやすい。物象化すると、人のつくり出した社会的な産物を、コントロール不可能で手出しのできない超人的な存在、あるいは、モノであるかのように理解することが起こる。知覚を重視した構成主義による変更可能性を確信できる教育が大事。


山本 (2022) における

構成主義への知覚からのアプローチ

1. 図地分化、あるいは全体の中に境界線を引き、**囲い込む (カテゴリー化) ことで、可視化して、知覚対象にして見ている。**
2. 知覚を通して構成する世界を、**現実味のある現実として生きている。**
3. 知覚体験は感覚器官がとらえた刺激を中枢神経 (脳と脊髄) に伝える働き、一言でいうと**脳の情報処理**によってもたらされている。**情報処理は**コミュニケーションへの参加を通じて**状況学習的に獲得された文化的なもの**であると同時に、**個人の神経発達の変遷性**にも影響されるものである。
4. **自分にはない感覚や知覚でも**、他者に見えて、聞こえて、感じられていることを**肯定すること**から始める。その世界をリアルなものとしたときの反応や行動があることを知る。(注: 他者の意見や価値観を肯定するのではない)
5. 考え方をええより、**注意の向け方を変える**ことで見える絵、耳に入る言葉、イメージとして想像できることを変える。それは次に起こることを予測する**シミュレーションをええ、予言の自己成就として作用する。**

図地分化、あるいは全体の中に境界線を引き、



囲い込む (カテゴリー化) ことで、可視化して、知覚対象にして見ている。



ルビンの壺とゲシュタルト心理学
エドガー・ルビンによる図地反転を示す多義図形。ゲシュタルト心理学で使用され広く知られるようになった。

図地分化
figure-ground distinction

日本語訳1987年出版

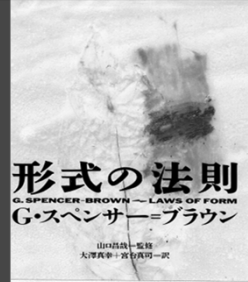
山本 (2022) による図地分化や分節の考え方は、**数学的知識や量子力学的な知識を構成主義的に扱っている**グレーザーズフェルドの「ラディカル構成主義」(1995) やスペンサー=ブラウンの「形式の法則」(1969) の応用に当たるとベネットは考えている。

↓
境界形成
boundary formation

ウンベルト・マトゥラーナとフランシスコ・ヴァレラのオートポイエーシス (自己組織化論) に影響を与えた。

「数学的なアプローチについての注釈」山口昌哉、『形式の法則』より。スペンサー=ブラウンが何を行っているかを述べている。(山本が表現を少し言い換えている)

ある空間が**切断され別々にされると**、一定の〈宇宙〉が存在するにいたる。切断の振る舞いはそれ自体、ある世界の中における異なったものたちを、その世界の中でまず最初に好きなどに境界線をあれこれ引くことで区別する。そのことを我々が意識できないとしても。〈宇宙〉と、我々がそこでどのように振る舞っているかということとは、区別することができない。



Bennett (2012) による量子力学的な構成主義観

「構成主義の考え方は“観測者/観測/観測者の相互作用による現実の組織化”という量子的な考え方と密接に結びついている」

Bennett (2022) 序章より 続き2

ものごとには、人がそれを観測するまでは、**潜在的にさまざまに存在しうる可能性の幅**というものがある。潜在的には**多様な可能性のある存在が、観測されたときには、ある特定の存在として観測されるに至る**のである。このことは量子力学における「ハイゼンベルクの不確定性原理」(Heisenberg Uncertainty Principle) として知られている。

人びとがいかなる集約的なやりかたによって、**潜在的な可能性のある特定の状況に崩壊させているか**に注目するという構成主義的な観点を強調することであり、これにより集団間の関係の改善を硬直化させずに考えることができる。

「崩壊」(collapse) とは量子力学における「**波動の崩壊**」の考えかたである。潜在的に複数の可能性にある「**重ね合わせ**」の状態から、観測者が特定の視点で観測する干渉によって、ある特定の状態へと存在が確定することを「崩壊」として表している。

Bennett (2022) 序章より 続き3

知覚構成主義は、構築された現実の社会的側面と物理的側面を組み合わせ、経験に対する統合された新しいパラダイムのアプローチを以下のように試みる。

- * 潜在的存在を現実性へと崩壊させる知覚の役割を社会的にも物理的にも認識する
- * 構成することによって生じる責任を引き受ける
- * 倫理的なコミットメントに沿った形で現実を再構成する機会を追求する

(ベネット)は量子力学が、物体の性質を測定から分離することも、測定装置を使う測定者から分離することも不可能と見なすことに触れ、「この見解において、**現実**は**予言の自己成就の性質を帯びており、そこでは、私たちの視点が予言なのである**。つまり、私たちが見ているすべてのものと、私たちの視点が必然的に相互作用することこそが、予言を実現させるメカニズムとなっている」(p.99, 著者訳)と述べている。

現実を組織化するのは人の視点であり、それが予言の自己成就を導いているという観点を示すことによってベネットは、現実も、特定の文化の経験もまた、私たちが習慣化した視点による産物であることを示唆している。つくっているのが私たちなのであれば、私たちに**現実を今とは別の形に整理し直す**ことが可能になる。だから、何にコミットした視点で現実を形づくることを選択するかが重要になる。「**こうありたい**」と望む未来を心に持ちながら日々を生きているときには、既にその視点で世の中を構成する図地分化を始めている。

山本 (2022) p. 319


山本 (2022) における
構成主義への知覚からのアプローチ

1. 図地分化、あるいは全体の中に境界線を引き、囲い込む(カテゴリー化)ことで、**可視化して、知覚対象にして見ている**。
2. 知覚を通して構成する世界を、**現実味のある現実として生きている**。
3. 知覚体験は感覚器官がとらえた刺激を中枢神経(脳と脊髄)に伝える働き、一言でいうと**脳の情報処理**によってもたらされている。**情報処理**はコミュニティへの参加を通じて**状況学習的に獲得された文化的なものであると同時に、個人の神経発達の特長性**にも影響されるものである。
4. **自分にはない感覚や知覚でも**、他者に見えて、聞こえて、感じられていることを**肯定**することから始める。**その世界をリアルなものとしたときの反応や行動があることを知る**。(注:他者の意見や顔面観を肯定するのではない)
5. 考え方を**変える**より、**注意の向け方を変える**ことで見える絵、耳に入る言葉、イメージとして想像できることを**変える**。それは次に起こることを**予測するシミュレーションを変え、予言の自己成就として作用する**。

DMISは、ピアジェやヴィゴツキーの構成主義的な発達論とマトゥラーナやグレイザーズフェルドのラディカル構成主義を組み合わせ、異文化トレーニングが他者に対する自文化中心の経験を経験をエスノリアティブな経験へと再構成するようガイドすることを示唆するものである。そのようなシフトを可能にするのは、**スペンサー＝ブラウンやケリーの考え方を応用した知覚的境界形成 (perceptual boundary formation)** の能力である。DMISやその他の関連・派生する発達モデルが、この能力を高めることを目的とした異文化トレーニングに影響を与え続けている限り、異文化コミュニケーションは基本的に構成主義的であるといえる (山本による翻訳)。

注：DMIS=異文化感受性発達モデルにおけるエスノリアティブな段階は、文化相対主義から構成主義までを含む

Bennett, M. (in press). A brief history and commentary on constructivism in intercultural communication theory and practice. Intercultural Research V11. Shanghai University Press.



■ ルビンの壺のような形式での図と地の分化も、**境界形成の1種**として考えることができる。

■ 数学の集合という**双対性**、量子力学におけるニールス・ボーアの**相補性**も、境界形成の1種と考えられる。

■ 知覚構成主義における図地分化・境界形成には、集合論的発想や「観察者は現実がその視点に沿って整理されるように自分の視点を介して現実と対話する」(Bennett, 2012, p.99, 著者訳) という量子力学的発想が反映されている。


山本 (2022) における構成主義への知覚からのアプローチ

1. 図地分化、あるいは全体の中に境界線を引き、囲い込む (カテゴリー化) ことで、**可視化して、知覚対象にして見ている。**
2. 知覚を通して構成する世界を、**現実味のある現実として生きている。**
3. 知覚体験は**感覚器官がとらえた刺激を中枢神経 (脳と脊髄) に伝える働き、一言でいうと脳の情報処理**によってもたらされている。**情報処理はコミュニティへの参加を通じて状況学習的に獲得された文化的なもの**であると同時に、**個人の神経発達の多様性**にも影響されるものである。
4. **自分にはない感覚や知覚でも、他者に見えて、聞こえて、感じられていることを肯定することから始める。**その世界をリアルなものとしたときの反応や行動があることを知る。(注：他者の意見や価値観を肯定するのはではない)
5. 考え方を変えるより、**注意の向け方を変える**ことで見える絵、耳に入る言葉、イメージとして想像できることを変える。それは次に起こることを予測する**シミュレーションを変え、予言の自己成就として作用する。**

構成主義への知覚からのアプローチ

人は見えたものに反応し
それを現実味あるものとして判断し、行動する。
だから、知覚が現実性に与える影響は大きい。

周辺人物にも視点移動して焦点化して見るか、見ないで背景化させるか。



- 社会的文脈が個人の感情の知覚に与える影響の研究
- 日本人もアメリカ人も、最初は中央の人物を見るが、日本人が他の人たちの顔を見始めるまで1秒程度しかからない。中心人物からのシフトが早く起こる。
- 日本人は背景の人の表情に気づきやすく、それらが中心人物の感情に関する情報を提供する。同じ笑顔の人物でも、周囲の人たちの表情によって感情が異なるように見える。

Masuda, T., Ellsworth, P. C., Mesquita, B., Leu, J., Tanida, S., & Van de Veerdonk, E. (2008). Placing the face in context: Cultural differences in the perception of facial emotion. Journal of Personality and Social Psychology, 94(3), 365-381.

参考：研究紹介<https://www.eurekalert.org/news-releases/544353>

環境からの視覚覚信号

高い輝度

大きな動き

自閉スペクトラム症者の知覚世界

コントラストの強調

不鮮明化やグレースケール化

自閉スペクトラム症知覚体験シミュレータ

- 神経回路の発達に多様性のあることから知覚の情報処理に多様性がある。
- 感覚過敏や感覚鈍磨

https://resou.osaka-u.ac.jp/ja/research/2015/20150316_1

参考：大阪大学大学院工学研究科の長井志江特任准教授 (現、東京大学ニューロインテリジェンス国際研究機構 特任教授) と東京大学先端科学技術研究センターの熊谷晋一郎准教授の研究グループ

構成主義への知覚からのアプローチ

知覚：成立した現実が何であるかを知る

注意：現実そのものの形成に関わる

注意の向け方を変える

「注意が向くことは、現実がそれとして成立することである。注意は、意識の志向性以上にはるかに基本的で、現実をどのように捉えるのか、あるいは現実とどのようにかわるのか以前に、現実そのものの形成に関与している。成立した現実が何であるかを知る場面で知覚が働く。そのため知覚はいくぶん二次的である。」

河本英夫 (2006) 『システム現象学：オートポイエーシスの第四領域』新曜社 p. 31

見えるものを変えるには、見方を変えるというよりは知覚する以前の注意の向け方を変える。新たな注意により、図と地の分化の仕方が変わると、現実（世界）の組織化が変わり、全体像が作り変えられる。

そのつど境界形成してできた立場の違いによって、**現実味のある世界が異なって見えている**。通用するはずの想定も異なっている。

絵が見えない、イメージがわからない、想像力が及ばないことは、リアリティに欠けるように思えてしまう。